

奉献・使徒的生活会省

今日の教会における奉献生活——福音、預言、希望

—「奉献生活の年」のロゴについて—



今日の教会における奉献生活——福音、預言、希望

一羽の鳩が、片方の翼で多角形の球体を支え、三つの星の現れる水の上でもう一方の翼を休ませています。

「奉献生活の年」のロゴは、奉献生活の根本的な価値を表すいくつかのシンボルによって描かれています。このロゴからは次のことが分かります。「聖霊は、非常に多様なカリスマを通して、福音的勧告を実践することの豊かさをいつの時代にも示しています。こうして、聖霊は教会と世界において、時間と空間のうちに、キリストの秘義をたえず現存させてもいるのです」（教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的勧告『奉献生活』5）。

鳩の形を描く線は、アラビア語で「平和」と読めます。それは、奉献生活が、キリストにおける全世界の和解の模範となるよう招かれていることを思い起こさせます。

ロゴに描かれたシンボル

水の上の鳩

鳩は、いのちの源であり創造性を奮い立たせる聖霊の働きを表わす古来のシンボルの一つです。それは、初めに神の霊が水の面を動いていた（創世記 1・2 参照）、歴史の始まりへとわたしたちを引き戻してくれます。いまだ混沌としたいのちに満ちた海に舞い降りた鳩は、忍耐と信頼のもたらす肥沃さを思い起こさせます。一方、鳩の周りにあるしるしは、聖霊による創造と再生のわざを表しています。この鳩はまた、洗礼を通してキリストの人

性が奉獻されたことも思い出させます。

モザイクのタイルで形づくられた水は、人間的要素と宇宙の要素による混合と調和、すなわち神の神秘的な計画によって聖霊が「うめいている」（ローマ 8・26—27 参照）さまを表しています。水は、新たな創造につながる、友好的で豊かな出会いに集まるからです。歴史の波間では、鳩は洪水の上を飛んでいます（創世記 8・8—14 参照）。福音が刻まれた奉獻生活者は、民の中を歩む巡礼者であり続け、「神のさまざまな恵みのよい管理者」（一ペトロ 4・10）として、それぞれの多様なカリスマと奉仕職を生きます。奉獻生活者は、殉教に至るまでにキリストの十字架が刻まれた者であり、福音の知恵をもって歴史を生きています。奉獻生活者とは、およそ人間に関するすべてのものをキリストにおいて抱き、いやす教会なのです。

三つの星

三つの星は、世における奉獻生活のアイデンティティ、すなわち「三位一体の信仰告白」「兄弟愛のしるし」「愛の奉仕」を思い起こさせます。また、奉獻生活が世にあって日々生きようとしている、三位一体の愛の循環と関係性を表します。三つの星はさらに、ビザンティン様式のイコンがマリアをたたえるのに用いる、三つの金の刻印を思い起こさせます。マリアは、至聖で、神の母、キリストの第一の弟子、そしてすべての奉獻生活の模範であり守護者だからです。

多角形の球体

教皇フランシスコが説明しているように（使徒的勧告『福音の喜び』236 参照）、小さな多角形の球体は、民族や文化の多様性を有した世界を表しています。球体を支え未来へと導いているのは、聖霊の息吹です。聖霊の息吹は、すべての奉獻生活者が「聖霊を運ぶ者（ Pneumatoforo ）となり、真に靈的な者になるよう（中略）、隠れた形で歴史を豊かにすることができる者となるよう」（『奉獻生活』6）招いています。

主題

Vita consecrata in Ecclesia hodie（今日の教会における奉獻生活）

Evangelium, Prophetia, Spes（福音、預言、希望）

この主題がいつそう浮き彫りにするのは、神の民である教会の中で、未来へと向かう諸民族と諸文化の道程において、奉獻生活者が経験し、また経験し続ける、アイデンティティや視点、体験や理想、恵みや歩みです。

「福音」は、「福音の中で示されている、キリストに従う」（『修道生活の刷新・適応に関する教令』2a）奉獻生活の、根本的な規範を意味します。それは第一に「イエスの生き方と行動の、真の生きた記念」（『奉獻生活』22）として、次に、主が弟子たちに与えた多くの勧告（『教会憲章』42 参照）に照らした人生の知恵として示されるものです。福音は、道を示す知恵と、喜びを与えます（『福音の喜び』1 参照）。

「預言」は、奉獻生活の預言的な特徴を思い起こさせます。「それは、聖霊によって神の民全体に伝えられる、キリストの預言者としての務めにあずかる特別な形で現れます」(『奉獻生活』84)。預言者としての真の役務は、生活のさまざまな場面で受け入れ経験した神のことばから生まれ、神のことばによって養われます。その務めは、勇気をもって罪を告発すること、神の新たな「到来」を告げること、そして「神の国の到来を待望しながら、歴史の中に福音を実現する新しい道を探究することによって」(同) 果たされます。

「希望」は、キリスト教的神秘の最終的な完成を思い起こさせます。わたしたちは、不確かなものに覆われ、広い視野をもった計画に乏しい時代に生きています。希望が文化的にも社会的にも脆く見え、見通しが暗いのは、「しばしば神の現存のしるしを見失っているように思われる」からです(同 85)。奉獻生活はたえず終末的なものを映し出しています。奉獻生活は、すべての希望は必ず実現し、その期待を「今ここで神の国を現実のものとするための働きと宣教」(同 27) へと変えていくことを、歴史を通してあかししています。奉獻生活は、希望のしるしとして人々に寄り添い、あわれみを示し、いかなる偶像崇拜とも結びつくことなく未来の模範となるのです。

「わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれている」(ローマ 5・5) のですから、奉獻生活者は全世界を受け入れ、三位一体の愛の記念、交わりと一致の執り成し手、祈りながら歴史の尾根に立つ番人、人々とともに苦しむ者、聖霊を静かに求める者となるのです。

「奉獻生活の年」のロゴの制作者

「奉獻生活の年」のロゴのデザインは、デリーノ・アートスタジオのカルメラ・ボッカシル氏に依頼されました。このスタジオは、リロ・デリーノ氏とカルメラ・ボッカシル氏によって一九七〇年に設立されました(イタリアのバーリ、ローマ)。

彼らにとって描くことは、形式においても起源においても「アイコン」です。それは、招きであり、出会いであり、対話でもあります。そのすべての芸術的な象徴は、不可視なものを目に見えるものとして直観し表現するための窓として理解され用いられます。つまりそのアイコンは、偶像を超えた、神へと開かれた象徴です。こうした考え方は、ニケア公会議の教父によって決定された芸術についての教え(七八七年)に近いものです。

カルメラ・ボッカシル氏は、画家であり卓越した図像学の専門家で、伝統的な表現法を新しい現代的な手法によって緻密に解釈します。彼女は、細部にわたる研究と、色彩のきめ細かさとも呼べる点で際立っています。アイコンの招きにこたえるかのようなそのきめ細かさは、色彩の内部から発せられる音の探求に、その音に耳を傾け心に向けることによるものです。デリーノ・アートスタジオにおける制作と並んで、カルメラ・ボッカシル氏は、芸術的な着想や文化的な時流をも自らのものとしていますが、アイコン画家としての特別な招きに対する自覚ゆえに、そうした中で生まれる作品とアイコン制作とを、区別し切り離し

で考えています。イコンの制作は、カトリックとギリシア正教の伝統からインスピレーションを受けており、とくに聖母マリアと聖ニコラオのイコンに強い関心が向けられています。ボッカシル氏はまた優れた肖像画家でもあり、芸術家としての絵画的特徴は「聖霊による素材」、また「色調の対位法」の表現として確立されています。

リロ・デリーノ氏（一九四三年バーリ生まれ、二〇一三年パリにて没）は、画家、グラフィックデザイナー、写真家、舞台美術家、プランナーです。数々の芸術賞を受賞したニコラ・ラ・フォルテツァ氏に師事し、展覧会や美術館の芸術監督を務め、シルヴィオ・チェッカート氏、ピノ・パリーニ氏、マウリツィオ・カルヴェーギ氏とともに科学プロジェクトに参加しました。彼はカルメラ・ボッカシル氏の夫であり、その知性と力強い創造力をもって、人生においても芸術においても、つねに一緒に聖霊を探し求めました。二人はともに数十年間にわたって、バーリの聖ニコラオ大聖堂の国際研究センター、ペトゥルツェッリ劇場、その他の音楽的、宗教的文化機関の顧問を務めました。また、イタリア司教協議会から、新しいイタリアの教会という試験プロジェクトにも招聘されました。こうして、デリーノ氏は質の高い芸術協会を立ち上げ、現在そこには、息子のダリオ氏も加わっています。彼は作家、また記号論の専門家としての経歴とともに、両親から受け継いだ絵画と造形における素質も兼ね備えています。

夫婦として芸術家としてこの二人は、人生を真に一にして生み出した作品をもって、現代イタリアにおける絵画やグラフィックアートの再評価に貢献しました。それは、キリスト教的伝統のしるしの中に超越者を探し求めることでした。